



よりよい自分を創るために

副校長 野口 幸一

コロナ渦の中、今年の夏も阪神甲子園球場で第104回全国高校野球選手権大会が開催され、数々のドラマが生まれました。優勝した仙台育英高校は、東北勢として初の全国制覇を成し遂げ、各メディアで大きく報道されました。その中で、高校球児たちのプレーに感動したのはもちろんですが、仙台育英高校の須江 航監督のインタビューが私の心に残りました。

監督は、インタビューの最初に『宮城のみなさん、東北のみなさんおめでとうございます。』とスタンドやテレビなどで観戦している地元の人々へ呼びかけたのです。そして、インタビューの最後には、コロナ渦で様々な制限がある中での活動を振り返り『全部だめだ、だめと言われて活動していても、どこかでストップがかかって、どこかでいつも止まってしまうような苦しい中で、でも本当に諦めないでやってくれたこと。でも、それをさせてくれたのは僕たちだけじゃなくて、やっぱり全国の高校生みんなが、本当によくやってくれて、例えば、今日の下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとか、そういう目標になるチームがあったから、どんなときも諦めないで、暗い中でも走っていったので、本当にすべての高校生の努力のたまものが、ただただ最後、僕たちがここに立ったというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手してもらえたらと思います。』と、全国の高校球児たちのこれまでの汗と涙と努力を讃嘆し、すべての人々に共感を求めました。本来であれば、自分の部員の頑張りを褒めたたえるところを、自分たちを支えてくださった方々やこれまで戦った相手チーム、それだけでなく、甲子園に出場することはできなかったけれども、夢に向かって努力を積み重ねた高校球児にスポットを当てていました。須江監督の人柄、人としての度量の大きさに感服するとともに、そんな指導者のもとでプレーができる球児たちは幸せだと思いました。

このインタビューを聞いた後に、以前研修で聞いた次のような話を思い出しました。それは、中南米のコスタリカという国で行われている、農産物品評会でのエピソードです。

ある農民実業家が、毎年のようにトウモロコシを品評会に出品し、毎年のように賞を受賞していたそうです。いつものように受賞をした後、テレビのリポーターが彼に質問をしました。どうしていつも評価をされる素晴らしい作物を作れるのかと。その質問に対し、彼は秘密にするでもなく正直に明かしたそうです。それは、自分のトウモロコシ農場でとれた良質の種の大部分を近隣の人に分け与えているということでした。リポーターは疑問に思い、さらに尋ねます。『近隣の人たちは、あなたのライバルですよ。どうしてそんなことをするのですか。』彼は答えます。『簡単なことです。風は、トウモロコシの花粉を飛ばし、あちこちの畑に運びます。私の近隣人たちが品質の悪いトウモロコシを作れば、受粉によって、私のトウモロコシの品質も下がります。良いトウモロコシを作るためには、周りの人たちのトウモロコシの品質も上がるように手伝うことが大切なのです。』と。

須江監督は、“自分たちのチームの成長のためには、ライバルとの切磋琢磨が必要であること。” コスタリカの農民実業家は、“お互いがそれぞれ重要な存在であり、自分がより良くなるためには、互いに助け合うことが必要であるということ。”を語っています。2つの話は少し意味合いが違いかもかもしれません。しかし、自分一人で成長することには限界があったとしても、他者と関わりあうことで、より自分を成長させることができるという点においては共通する部分があるのではないのでしょうか。

本日より2学期のスタートです。学校は多様な仲間と関わり合いができる場所です。学習、行事などを通して多くの仲間と切磋琢磨し、子供たちがよりよい自分を創ることができるよう、教職員一同、全力で支えていきます。保護者の皆様のご理解とご協働を、引き続きよろしくお願いたします。

【子供たちの“笑顔かがやく”ために】

学校標語の「笑顔かがやき 優しさいっぱい」の実現に向けて、2学期も様々な取組を行っていきます。

1年生から3年生までは、楽団エバリーによる、音楽鑑賞教室を9月20日（火）に本校体育館で実施します。また、4年生から6年生までは、東京都教育委員会が主催する“子供を笑顔にするプロジェクト”の支援を受けて、11月8日（火）に「水上バスでめぐる TOKYO 2020大会 ベイエリア遊覧クルーズ」に参加できることになりました。ベイエリア遊覧クルーズの詳細については、後日お知らせします。

